「今を生きること」　　福井市足羽中学校　２年　増永　沙泉（ますなが　さい）

私の家では６時５０分になったらいつもニュースをかけています。
「昨日の新型コロナウィルスの感染者は〇〇人で〇日連続で先週を〇〇しました。」
毎朝、こんなニュースを見るのが普通になってしまいました。毎日、毎日マスクをして手洗い消毒、換気に検温、これらの対策があるおかげで、こうして今学校に来られていますが、そのたびに私たち中学生の悩みも増えています。
「マスクをしているからみんなの顔が分からない。」「勝手にマスクの下を想像されるのがこわくてマスクをとるのが恥ずかしい。」「マスク焼けが嫌。」「一生の思い出となる修学旅行が県内。」
行けないよりはましだとは思いますが、新型コロナウィルスの影響で制限されているのは事実です。しかし、このように制限された社会の中で、生まれた考えや思いがあります。
感染者が増えて部活ができないとなったときに、家でできることをしようと筋トレやストレッチを考え、自主的に練習する力がついたり、当たり前にできていた部活や学校生活は当たり前ではないのだと気づくことができたりしました。また、県内での修学旅行となった小学生や中学生、高校生は新たに県内の素晴らしさを発見するきっかけともなりました。私は実際に小学６年生の時に新型コロナウィルスの影響で県内での修学旅行となりましたが、今まで実は行ったことがなかった県内の観光スポットに行ったり、魅力を見つけたりと、とても良い修学旅行になりました。
また、学校の教室やドアを消毒してくださっている人やコロナ禍の最前線で働いてくださっている医療従事者の方々に、感謝する気持ちの大切さも知りました。これらはコロナ禍にならなければ、できていなかったと思います。けれど、一方で薄れていっていると感じるものがあります。
それは伝統です。
私は先日このような見出しの新聞記事を見ました。
「校歌歌える？」「伝統継承へ危機感」
これはコロナ禍の影響で、県内の各学校で校歌を歌う機会が減り、特に音楽が必修ではない高校の生徒が、メロディーを覚えないまま卒業してしまうのではという、伝統の継承へ危機感を持っているという記事です。
私はコロナ禍で中学校に入学しました。その入学式の様子は、小学校の卒業式と同じように在校生の姿はありませんでした。私の中学校では、まず入学式に在校生が校歌を大きな声で熱唱するという文化があるそうで、私の入学式では、過去の集会で校歌を歌う映像が流されました。それは校歌を歌う声が大きすぎて、スピーカーの音が割れてしまっていました。映像でも校歌に対する熱がよく伝わってきました。私は音楽の授業の時に校歌を歌ってきましたが、２年生になってもまだ１度も集会で校歌を歌ったことがありません。今の中学校や高校で、コロナ禍前の学校の様子を知っている人はいません。しかし、そのような中でも誇れる伝統を、形を変えながらもつないでいかなければならないのだと思います。
私は「この御時世だから。」という言葉が嫌いです。それはコロナ禍になり諦めて、難しいことばで自分を宥めているように思うからです。確かにコロナ禍で何かを諦めることはありました。けれど、ただ諦めて終われば何も変わりません。新型コロナウィルスの影響で、良くなったものも悪くなったものもあります。そこで、どちらに目を向けていくかで、社会は大きく変化していくと思います。私は今生きていること、生きていられることに感謝して、これから生きることで大切にしたいもの、伝統や考え、自分たちの思いを誰かにつなげていきたいです。あと何年、何十年と続いていくのは新型コロナウィルスではなく、今を生きている自分たちの思いであることを願っています。
来年こそ、私の修学旅行は県外で楽しみたいです。